

# 高知県の私学の源流についての一考察

—明治大正期に設立された私立学校—

岩崎 保道<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門)

A Discussion on the Origin of Private Education in Kochi Prefecture  
Private Schools Established in the Meiji and Taisho Periods

Yasumichi Iwasaki<sup>1</sup>

*<sup>1</sup>Kochi University Research and Education Faculty, Humanities and Social Science Cluster,  
Education Unit*

Abstract : This paper summarizes private education established in Kochi Prefecture in the Meiji and Taisho Periods. Many private educational institutions were founded in Kochi Prefecture in the Meiji Period under the philosophy of free thought. However, most educational institutions were closed due to various circumstances such as the tide of times and trends of educational policies. This paper focuses on private schools that are still providing education amid such situation, and pays attention to and summarizes the reasons and background for their establishment and the details of the education around that time.

キーワード : 私立学校 , 高知県 , 明治時代 , 大正時代

Keywords : Private School , Kochi Prefecture , Meiji Period , Taisho era

はじめに

本稿は、明治大正期に高知県に創設された私学教育の源流をとりまとめたものである。特に明治期の高知県は自由民権運動が盛んになり、団体や個人の様々な思想や意図の下、民間の出資による教育機関が多く設置された。それぞれに教育の理念や目的があり、同時に市民の教育ニーズに応える社会的役割を果たすものでもあるが、激しく移り変わる時代背景や教育政策の動向、経営管理の事情などから、民間が設置した、ほとんどの教育機関が廃校になった。そのような状況の中、現在も教育活動を行う私立学校に焦点を当て、創設の理由や背景、環境などを整理するとともに、その教育内容に注目してまとめた。とりわけ、家塾から大規模な私立学校に発展したもの、宗教教育を背景としながら強い篤志を持って恵まれない子どもたちに教育を提供するもの、将来的に国家の発展に寄与するような人材を育成すべく英才教育を行うものなど、興味深い教育活動を行う学校がある。

本項で紹介する私立学校4校全てが100年以上の歴史と伝統を有しており、戦争や県の教育事情の影響など、多難な時代を乗り越えて現在に至っている。それぞれの設置理念の下で誕生した私学を考察することは、地方都市の私学教育の在り方を検証するうえで有意義と考える。

## 1. 明治大正期における高知県の教育事情

廃藩置県後、高知県の教育政策は、郷学校（幼年課）、小学校（小学課）、致道館・語学校（中等課）という単線型の学校系統が組織されていた。このことを背景に、旧藩の教育制度を基礎として、高知県独自の立場から全県民を対象とする教育制度の近代化を図っていた時期であった。

明治初期の高知県の私立学校は、立志学舎の開学（1874）に刺激されて、静儉学校（1874）、香長学舎（1879）、猶興学校（1879～1885年頃に運営）などが設立された（注1）。高知県教育史編集委員会（1964）は、「明治前期には（中略）数多くの私立学校が設立され、本県における私学の黄金時代を現出した。」と述べている<sup>1)</sup>。その他、土佐藩藩主であった山内豊範が設立した海南私塾を基礎にした海南私塾分校（後の中学海南学校、1876）、高知医学校（1879）、立志学舎の後継である高知共立学校（1882）、土佐技芸学校（1908）などがある。また、法学館（1884）、芸陽学校（1886）、泰平学校及び法律学校（1888）などの私立中等教育機関が創立された。

明治期の高知県の女子私学教育は裁縫や手芸を中心としたもので、規模は小さく学校としての設備を整えたものは少なかった。例えば、高知県初のキリスト教系の宗教学校 高知英和女学校（1886）、中村千賀が設立した中村女子手芸伝習所（後の中村女子手芸学校、1891）、勝賀瀬滝が設立した勝賀瀬裁縫伝習所（後の勝賀瀬裁縫女学校、1895）、高知婦人実業会が設立した高知実業女学校（後の高坂高等女学校、1899）、宮内兎美衛が設立した宮内裁縫伝習所（後の宮内女子成業学校、1899）、横田久寿吉が設立した成女学舎（1901）などがある。後に多くの私立学校が閉鎖されていくが、その理由は、「生徒数の減少」「合併のため」「教育に関する戦時非常措置方策（1944）のため」など様々である。

## 2. 高知県の私立学校の源流

### 2.1 江陽学舎（現在の高知学園）

高知学園は、信清権馬（図1）が1890（明治23）年に始めた寺子屋風の家塾であった信清塾（高知市山田町）に始まり、それを1895（明治28）年に拡張して学校式の教授を開始し、さらに1899（明治32）年に高知県の認可を受けて設立した江陽学舎（注2）（高知市中新町）が源流である（図6の①）。江陽学舎は、当時、入学が難しかった高知県師範学校へ入学するための予備校的役割を担った。いつでも入学が許可され、本科と速成科（別科）に分かれており、修業年限は2か年または1か年であった。校舎は民家を改造したもので運動場はなかった。在學生は40名～60名程度であり、本科の授業は権馬一人が全教科を担当し、別科は別の教員が受け持った<sup>2)</sup>。橋本（2020）は初期の江陽学舎を「学校というよりは権馬氏の私塾のようなものであったことが窺える。」と述べている<sup>3)</sup>。



図1 信清権馬

後に入学志願者が増加して学舎が狭小になったため、1906（明治 39）年に北新町に移転した。同年、女子部を新設して女子教育に力を注ぎ、1909（明治 42）年に市立商業学校入学の予備教育を行う目的で商業予備科を設置した。当時の江陽学舎の生徒数は、師範予備科、商業予備科、高等女学校予備科の合計で 200 名に達している。このように権馬は、積極的な学校経営を展開していった。

1914（大正 3）年には江陽学校と改称し、1921（大正 10）年には財団法人城東商業学校を設立した。江陽学校は前身の江陽学舎と同じく、師範学校の予備校的な役割を担っていた。

1956（昭和 31）年に学校法人高知学園に組織変更して現在に至っている。同学園は、建学の精神である「人に信頼される人材の育成」の理念の下、高知県の私立学校として最も規模が大きく、幼稚園から大学までを擁する総合学園に発展した。

## 2.2 高知女学会（現在の清和女子中高等学校）



図2 アンニーダウド

高知県におけるキリスト教の伝道には外国人宣教師の活動が大きく、1878（明治 11）年にアメリカの宣教師が立志社で説教を行っている。宣教師達は伝道だけでなく、教育事業も行った<sup>4)</sup>。アンニーダウド（図 2）がアメリカから来高したのは 1887（明治 20）年であり、高知英和女学校で教鞭をとるためであった。しかし、同校は 1898（明治 31）年に廃校となった。

ダウドは、恵まれない子どもを支えるべく、1901（明治 34）年に家を借りて二人の少女に教育を始めた。この活動に希望者が集まったため、アメリカの長老会と知人の寄附金を基に 1907（明治 40）年に高知市鷹匠町に九百坪の土地を購入し、高知女学会として洋風の校舎を建造した（図 6 の②）。生徒数は 30 名を超えた。入学希望者は逆境にある者に限られ、家庭の事情や本人の素質を詮衡した上で入学が許可された<sup>5)</sup>。ここで、クリスチャン・ホームでの宗教教育が行われた。後に建物が老朽化したため、ダウドは改造のための資金調達の活動をアメリカで行った。その結果、マクシミランの寄付を得て 1913（大正 2）年に新校舎が完成した。1915（大正 4）年には経営が南長老教会となった。同校は 1919（大正 8）年に高等女学校程度の教育を行う修業年限 5 年の学校となり各種学校の許可を受けた。教科は聖書、英語、音楽、手芸一般等である。宣教師 2 名、教員 9 名、事務職員 3 名、生徒は約 40 名であった<sup>6)</sup>。

1930 年代にダウドが帰米することになり、高知女学会の経営は日本キリスト教団高知教会に移譲された。1936（昭和 11）年に高知女学会は廃校となり、清和女学校としてキリスト教女子教育が始まった。特色として、「キリスト教信仰の基礎の上に、日本の女性として最も堅質な教育をする。」とされた。

第 1 回の生徒募集（本科 50 名、実業科 50 名）に対し入学者は 10 名だったが、1940（昭和 15）年には定員の 50 名を超える入学者があった<sup>7)</sup>。戦後の 1953（昭和 28）年に清和女学校は学校法人清和女子高等学校として認可を受けた。同校の建学の精神である「心の清い人々は、幸いである。平和を実現する人々は、幸いである。」の理念の下、宗教系学校として特色のある教育を行っている（注 3）。

## 2.3 高知女学校（現在の土佐女子中学高等学校）

高知女学校は、1902（明治 35）年に裁縫手芸を主とする学校として前田松寿（図 3）が設立した（図 6 の③）。高知市枳形に民家を借りて家塾として始まったが、彼女を慕って十数名の生徒が集まった。同年、近隣に立地していた成女学舎の横田久寿吉が、両校の位置が極めて近いことから両立し難いと考えて、前田に合併を申し入れた。前田は、自校の教育環境や経営事情などを勘案して合併を受け入れ、拠点を成女学舎に移し、校名を土佐女学校に改称した。初



図3 前田松寿

代校長はローマ字論者の南部義壽が就任した。開校当時の専任教員は少数であり、主に公立学校の教員が余暇を割いて兼務した。発足時、普通科は県立高等女学校の教科課程よりも裁縫・手芸に重点が置かれ、専修科は私立裁縫学校よりも普通科を重く見ていた<sup>8)</sup>。生徒数は128名（普通科1年生60名、2年生56名、技芸専修科12名）であった<sup>9)</sup>。

土佐女学校の発展のため、同校は当時、広い校地と校舎を有しながらも入学志願者の著しい減少のため、閉校の危機にあった高知共立学校に合併を申し入れた。両校は1903（明治36）年に合同することが決まり、共立学校が土佐女学校を運営することになった。校地は枳形から高知市大手筋に移転した。翌年、同校は高等女学校に昇格し、校名を土佐高等女学校に改称した。

1903年の生徒数は268名（うち本科237名）だったが、1926（大正15）年に教員数：25名、生徒数：805名（うち本科759名）と規模が大きくなった<sup>10)</sup>。

現在、土佐女子中学高等学校の教育方針として「明朗」「聡明」「愛情」「気品」が掲げられ、「グローバルな社会で改めて求められる人間力。土佐女子は改めて4つの柱を軸とし、自分らしくしっかりと羽ばたいていける子どもたちをバックアップしていきます。」の土佐女子ビジョンが示されている<sup>11)</sup>。

## 2.4 土佐中学校



図4 川崎幾三郎



図5 宇田友四郎

土佐中学は、1920（大正9）年に川崎・宇田財団法人により、社会に貢献する人材を育成することを建学の精神として創設された<sup>12)</sup>。設立者の川崎幾三郎（図4）と宇田友四郎（図5）は、明治時代の高知県を代表する実業家であった。学校は高知市潮江に設置された（図6の④）。

同校の本来の創立趣旨、建学の精神を設立趣意書より要約すると「本校は大戦後の国運の進展にともなう中等学校内容充実の趣旨により設立されたのであって、中学校令で示される中堅国民の養成を目的とすることは議論するまでもないが、また一面、高等

教育を受けるのに十分となる基礎教育に力を致し、修業後は進んで上級学校に進学し、将来国家が待ち望むような人材を育成することを期待しての設立である。」とされる<sup>13)</sup>。同校は少数英才教育を目指すものであったが、その背景として、土佐中学校・高等学校（2020）は、「大正時代中期の高知県において、明治維新の栄光を懐かしみ、現状を憂えて、もう一度当時のような人材輩出の県に立ち返らんとする、焦りのようなものがあつたのではないかと推察している<sup>14)</sup>。さらに、「土佐中学校は、はっきりと秀才教育、英才教育といった目的をもって創立されたことがわかる。」と指摘している<sup>15)</sup>。初代校長の三根圓次郎は、教育の五大方針として「個人指導に重きを置き教授能率の増進を計ること」「天賦の能力を発揮し自発的修養に努めしむること」「堅忍剛毅の性格健実なる思想を養成すること」「責任を重んじ好んで労に就く習慣を養うこと」「運動を奨励し養護上の注意を怠らず以て体位の向上を計ること」を示し、少数精鋭の生徒に対する個人指導に重点を置くことなど基礎学力の向上だけではなく、運動を奨励して生徒の体力向上も視野に入れたビジョンを表した<sup>16)</sup>。

生徒定員は本科各学年30名、予科各学年15名の少人数であった。開校時（1920）の教員数：5名、生徒数：49名（うち本科26名）だったが、1926年に教員数：12名、生徒数：147名（うち本科117名）と規模が大きくなった<sup>17)</sup>。

現在の同校の教育方針は、「未来を切り拓く力をはぐくみ、自らの創造性を遺憾なく発揮し、社会に貢献しうる人材の育成に努めてまいります。」としている<sup>18)</sup>。



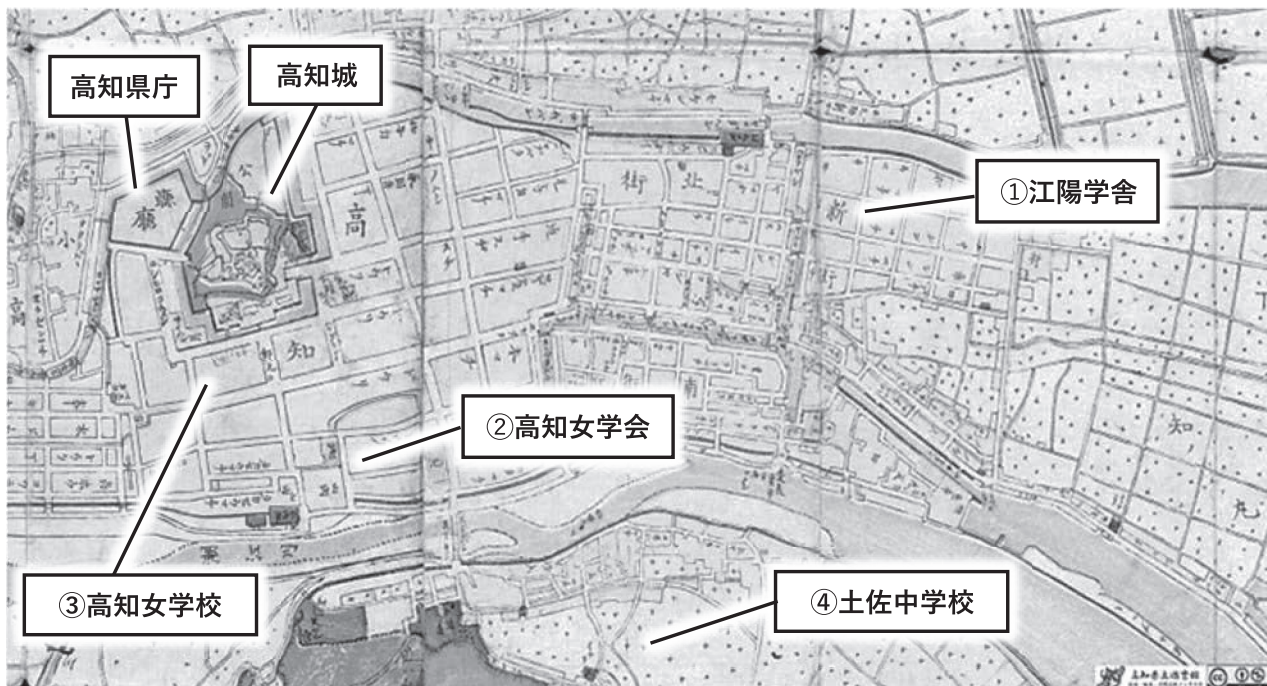


図6 明治期の高知市街（出典）河田小龍（1878）「高知市街全図」／高知県立図書館所蔵

#### 小括

私立学校が誕生する条件には、事例で見たように学校を設立するための資金、教員や支援者などの存在に加えて、創設者の創立者の教育に対する強い情熱がある。社会的ニーズの大きさや、所轄庁の認可も大きなポイントになる。

今後の課題として、明治期に高知県で設立された学校のほとんどが姿を消したなか、現代も引き続き教育を行う学校の経営に注目したい。安定した教育を支える経営ビジョンや財政、リーダーシップ、組織、生徒募集など、いくつかの視点で考察することは、私学経営の在り方を考える上で参考になるだろう。

#### 注

注1 立志学舎については、影山昇（1972）「明治初年の土佐派自由民権結社「立志社」と「立志学舎」の教育」『愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学』、高知市自由民権記念館（1998）『立志社～その活動と憲法草案、高知市立自由民権記念館』、拙著（2021）「高知県における明治期の自由民権運動を背景とした私学教育の展開」『岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要』（21）などを参照されたい。

注2 本稿は便宜上、校名に付記される「私立」を割愛した。後述の学校も同様とする。

注3 現在の清和女子中高等学校の所在地は、高知県南国市明見である。

#### 文献

- 1) 高知県教育史編集委員会（1964）『近代 高知県教育史』, p.54.
- 2) 橋本達広（2020）「高知学園の歩みを振り返る」, 学校法人高知学園『創立百二十周年記念誌』, pp.44-46.
- 3) 橋本, 同書, p.44.
- 4) 清和学園八十五年史編纂委員会（1987）『清和学園八十五年史』, p.5.
- 5) 清和学園八十五年史編纂委員会, 同書, pp.10-11.
- 6) 清和学園 100周年委員会（2001）『清和学園 100周年記念史』, p.7.

- 7) 清和学園 100 周年委員会,同書,p.10.
- 8) 土佐女子高等学校 (2002)『創立百周年記念誌』,p.134.
- 9) 土佐女子高等学校,同書,p.133.
- 10) 高知県教育史編集委員会,前掲書,p.735.
- 11) 土佐女子高等学校ウェブサイト:2022年9月1日確認.
- 12) 土佐中学校・高等学校 (2020)『創立百年史 土佐中学校・土佐高等学校』,p.75.
- 13) 土佐中学校・高等学校,同書,p.76.
- 14) 土佐中学校・高等学校,同書,p.79.
- 15) 土佐中学校・高等学校,同書,p.79.
- 16) 土佐中学校・高等学校,同書,pp.85-86.
- 17) 高知県教育史編集委員会,前掲書,p.731.
- 18) 土佐中学校・高等学校ウェブサイト:2022年9月1日確認.

令和4年(2022)10月28日受理

令和4年(2022)12月31日発行